



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2020年4月15日発行 第24号

とうとう「緊急事態宣言」が7都府県に発令（4/7現在）され、新型コロナウイルスの猛威の恐ろしさが私たちの身近にもいよいよ迫りつつあるようです。この緊急時に個人としての行動はどうあるべきかを真剣に考えていく必要性を感じています。不要不急の外出を控える事に慣れない生活などをどのように見直すのかを市民、いや国民一人一人に問われているようです。本アカデミーでも最善の対策を講じながら新年度を迎えたいところですが、現時点では感染拡大が一日も早く収束に向かうことを祈るばかりです…。

このコロナ問題で人間社会が一番注意しなければならないのは、「コロナ差別」です。相手を気遣う社会生活が崩れないよう、細心の注意を払いたいものです。

◎ ファミリーコンサート中止の衝撃から得たもの！

「出雲の春音楽祭2020」に続いて「第15回ファミリーコンサート」も中止となり、相次ぐ公演中止に残念だけでは片付けられない停滞感なるものが漂っている現状です。特に本アカデミー音楽院にとって「ファミリーコンサート」は各講座の年度末発表会という位置づけであり、1年間の学びの成果をステージで発表するものです。コンサートに向けて最後の仕上げ段階に来て中止宣告を受けた受講生にとって残念と言うより無念であったことと思います。このファミリーコンサートは、高校新3年生にとって修了を意味するもので、長年継続し受講してきた最後の講座でもあります。修了生にとって記念すべきコンサートをも取り上げることとなり、主催者側としてはとても心苦しい決断でした。

本アカデミーの運営会議は、定期的に月1回開催していますが、2月に開催した「春まちコンサート」後、全国で新型コロナウイルス感染が拡大し始め、この頃から日を追うごとに回数を増やし、現在では毎週開催し対策を講じています。公演中止や各講座の中止にあたっては、様々な影響力を鑑み、慎重に決定がなされなければなりません。こと未知のウィルス感染ということもあり、人命優先という観点から最終的に決断されたものです。特にファミリーコンサートは、年度末発表と修了講座の意味合いから、「無観客」、「修了生だけのガイダンス」、「DVD記録」など、あらゆる可能性を探りましたが、どのような方法でも濃厚接触は免れないことに行き着き断念に至りました。

本アカデミー音楽院が誕生して15年、このような緊急事態は初めてのことであり、戸惑いは隠せないところですが、いつまでもネガティブ思考では前向きになれません。そこで、ピンチはチャンスというポジティブ思考に切り替えることが困難を乗り越える契機になることと考えました。ポジティブ思考の一つは、講座や公演が無くなった期間を活用して、芸術監督の提案もあり事務スタッフや指導講師による諸会議を開催し、次年度に向けた対応策等を日々



意見交換しています。このような会議は、平常時には出来なかったことで、関係者の意思疎通がより高まり絆が深まっていることは、緊急事態が私たちに本アカデミー事業を見直す切っ掛けを与えてくれた贈り物と捉えることが出来そうです。

来年度の出発に当たっては、社会情勢を精査すると共に情報収集をこまめに行い、ウィルス感染対策が徹底されたうえでの講座等開設が望まれるところです。そして、新しく生まれ変わろうとする出雲芸術アカデミー事業に期待していただきます。

つぶやき

新型コロナウイルス感染に伴う対応策について疑問に思うことが沢山あります…。政府の施策を見てみると、「命」と「経済」のどちらに重みをおいているのか問われれば、どうしても経済にしか向いていないのではないかなと思わざるを得ません。意思決定の遅さの理由にも、東京オリンピックが延期決定されてからようやく「緊急事態宣言」が発令されました。支援策も108兆円規模と豪語していますが、支援してもらうには手続きの難しさと条件の厳しさによりどこまで行き届くのか不明瞭極まりないものです。また、政府主導の対策はあまり見受けられず地方自治体任せが目立ちます。どうして国の財政支出をそこまで出し惜しみをするのか考えるに、ここに来て「借金大国ニッポン」の存在が大きく影響しているものと思うのです。ある国会議員は、「コロナ感染が収束した後に経済を立て直すための予算が必要」発言があったそうです。私からいわせれば、順番が逆のようですが…。

私は、学校現場出身であり教育の視点からよく例として活用しますが、各教科の中で一番大切なのは「保健体育」です。何事も身体の健康あっての人生ですから…。次に「芸術（音楽・美術）」です。いつも心が爽やかで健康なら豊かな人生が拓けます。その次は「生活（技術・家庭）」です。生活力が身につけば知恵がつき安心安全な人生が歩めます。その基本条件がそろってこそ、初めて他の学問が生きてくることと思います。これらのことから、「命」の重みがいかに大切なことが私なりに考えていますが、政治家は何を躊躇しているのかが理解できません…。

本アカデミーの関係者として「芸術」に視点を当てて見ますと、欧州の芸術文化に対する先進国の対応は、いち早く芸術文化に支援を発表したのがフランスです。（さすが文化の国！）ドイツでは、芸術文化は「生命維持装置」のようなものと例え、最大限の保証を約束すると発表しています。さらにドイツ在住の日本人ピアニストによると、支援金を交付してもらうのに納税番号からネットで10分程度打ち込みをすると、3ヶ月分60万円が即座に振り込まれたといいます。優先すべき順番が国によってこれほど違う現実には驚きを隠せません…。日本の危機管理が問われているのかも知れません。

危機管理といえ、今の政治家は「法律」を前提に、動こうとしない姿勢が多く見られます。確かに法治国家であることは国民皆承知しています。しかし、国家危機が迫っている時に法律を盾に何も出来ないのであれば、滅び行くのを指をくわえてみているだけの状態に近いこととなります…。忸度しない気概のある政治家と決断力のあるリーダーの出現に期待したいところです。

最後に「芸術文化を大切にしない民族は遠からず滅びる」という格言がありますが、もっと心が豊かになれる民族となりたいものです。

なお、このつぶやきは私見であり意見には個人差があることを申し添えます。